

ふれあい

発行二十周年記念号

地域視点で新しい文化を創造し
住みつつつけたいまち「瀬田東」

瀬田東文化振興会

発刊について

新聞づくりには、縁遠い人間の集まりでしたが、地域の歴史や子ども達が体験を通じ、学びの芽をつくり育てる活動等の状況を広報で伝えることにより、人と人とを繋ぐ役割を果たすことに気付き、二〇〇一年に創刊号を発行しました。

月日が経つのも早いものです。二十年が経ちます。当初、ネーミングは「文振だより」と素朴なものでした。内容は地域の歴史や社寺仏閣の紹介等約三年間広報してきました。

それ以降「ふれあい」と名を改めて、遺跡復元事業の紹介や親子で米作り体験事業、文化祭、保育園や幼稚園児への体験活動の紹介等々。

二〇一八年からカラー版にし、地域の文化財の記事を専門家に依頼し、より深く紹介。二ページ以降は「時代を開く文化の翼」をメインに、学園通りこども園も加わり小学生親子体験活動や地域文化に関するまちの紹介を行ってきました。

また、二〇二〇年はコロナ禍で、人と人との繋がりが希薄化するなか、より広報が重要な役割を果たすものと思います。

これからも「地域愛」を忘れることなく、新たな目標(地域視点で新しい文化を創造し住み続けたいまち「瀬田東」)にチャレンジしていきますので、ご協力を宜しくお願いいたします。

二〇二一年四月吉日

瀬田東文化振興会長 松田 文男



もくじ

一、特集	
・源内道で結ばれた上田上の歴史	
滋賀県立安土城考古博物館 学芸員	
「中野城について」	福西 貴彦
(一)六角氏と家臣団	三
(二)中野氏	四
(三)中野城と法蔵禅寺の発掘調査	五
二、「地図を読む」	
(公財) 滋賀県文化財保護協会 調査課	
神保 忠弘	六
三、蛍が飛び交う長沢川	西本 和正
四、特集・短編小説(特別寄稿)	七
「僕らの夏」	前田 紀子
八〜十一	
五、地域連携型体験学習について	
瀬田東小PTA	十一
学園前こども園	十二
瀬田東幼稚園	
一里山ひかり保育	
六、国史山ノ神遺跡復元の追想	吉居 紀生
十三	
七、時代を拓く文化の翼	崎田 孝行
十三	
八、郷土料理	十四〜十五
「いとこ煮・ほらがい」	瀬田北女性会

QRコードを是非スマホで見てください。

カバー写真 堀井 雅和
挿絵 吉居 紀生



一、六角氏と家臣団

中野氏や中野城について考える前に、一見遠回りでも当時の近江国の状況、すなわち、六角氏やその家臣団の状況を概観します。

近江国は鎌倉時代から、宇多源氏の名門佐々木一族の定綱が守護に任じられ（文治三年、一一八七年）、中でも六角氏が惣領として守護を務めてきました。時には同族である京極氏の勢力が勝り、六角氏は守護の座を明け渡したこともあります。しかしながら、中世を通じて近江国の守護は六角氏がそのほとんどを占めていました。そして戦国時代、織田信長の近江侵攻により起きた観音寺城の戦い（永禄十一年、一五六八年）で六角承禎（義賢）・義弼（義治）父子が敗れ、甲賀郡に落ち延びるまでの三十八年間にわたり近江国は六角氏の勢力下でありました。このことは全国的にも非常に珍しい例です。

さて、六角氏と家臣団の状況を考える史料として「六角氏式目」を挙げます。この「六角氏式目」は永禄一〇年（一五六九年）に成立したとされる分国法です。織田信長の近江侵攻のわずか一年前です。これには永禄六年（一五六三年）に起きた「観音寺騒動」が関係しています。

「観音寺騒動」とは、六角義弼が重臣後藤賢豊父子を観音寺城内で誅殺したことが発端です。このころの六角氏は、義弼の祖父に当たる定頼が京都の中央政権の中で勢力を広げ、管領代を受けるほどでした。同時に近江国内においても、北近江で勢力を伸ばしていた浅井氏を配下に置くなど、六角氏の全盛といってもよい期でした。ところが父

義賢は、三好長慶との京都での勢力争いに敗れ、それを受け近江国内でも浅井氏が台頭します。六角氏の勢力が弱り、支配基盤が揺らぎ始めたのです。そこで義弼は、重臣後藤氏を誅することにより、当主としての権威回復を図ったのです。ところがこれが完全に裏目となり、大半の家臣団が反発し、各々の城に籠るといふ事態にまで発展したのです。事態は家臣の蒲生氏などが仲介し、ほどなく収まったようですが、先の「六角氏式目」を受け入れるなど、家臣団に譲歩した決着で、それまでの権威を取り戻すには至りませんでした。

この「六角氏式目」は当主に対し家臣団が突きつけるという珍しい形で成立した分国法です。ほかの文書や「六角氏式目」に署名した家臣を分析した村井祐樹によると、『式目』署名者たちは六角氏家臣の中で中心的な存在であったものの、「全て『式目』に署名しているわけではない」（村井二〇一二）としています（図・表）。つまり表向きは家臣団の中でも中心的な家臣が結束し、当主である六角氏にその権力を制限するために分国法をつきつけました。

しかし、家臣団も一枚岩ではなく、様々な思惑や家臣同士の関係など、決して単純なものではなかったようです。それは、近畿周辺にみられる人の自治意識の高さに起因していると思われる。また、自治意識の高さ故か、六角氏没落後の家臣団の動向も様々で、織田方に降るものから、六角氏に追従するものなど様々な思惑により、複雑な状況でした。これを露呈させたのが、観音寺騒動から『六角氏式目』成立までの一連の出来事だったのです。

【引用・参考文献】村井祐樹 二〇一二 『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』思文閣出版

表 「六角氏式目」の署名者（村井2012）

三上氏（越後守恒安）
後藤氏（喜三郎・高安）
三井氏（新五郎治秀・離相庵将鶴）
池田氏（真光寺周揚・孫次郎景雄）
蒲生氏（下野入道定秀・左兵衛大夫賢秀）
青地氏（入道道徹・駿河守茂綱）
永田氏（備中入道賢弘・刑部少輔景弘）
平井氏（加賀守定武・弥太郎高明）
馬淵氏（山城入道宗綱・兵部少輔健綱）
三雲氏（対馬守定持・新左衛門尉成持）
進藤氏（山城守賢盛）
檜崎氏（太郎左衛門尉賢道）

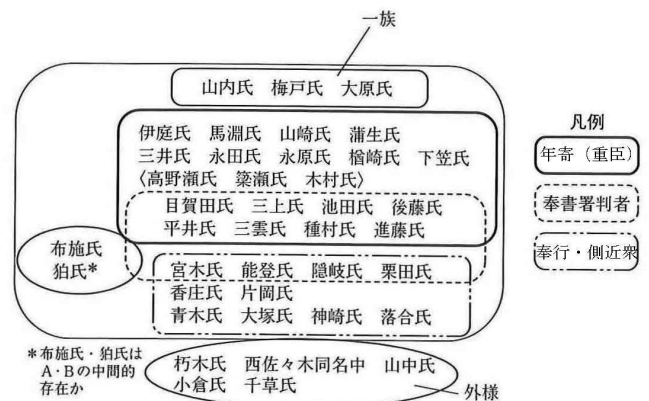


図 六角氏家臣団の分類（村井2012、一部改変）

二・中野氏



中野氏については、現在まで中野家に伝わる文書群がその多くを語っています。他には『江州佐々木南北諸士帳』という江戸時代に佐々木氏を中心として、各郡の城名と城主の名を列記し編纂された史料があります。原本は所在不明ですが、宝暦三年（一七五三年）の写本が伝わっています。

これによると、芝原には中野備後守と芝原左衛門の二氏があり、中野備後守は「佐々木随兵」、芝原左衛門は「中野末」となっています。このことから、上田上芝原村に中野一族が領していたと考えられます。

しかし、大正一五年（一九二六年）刊行の『近江栗太郡史』によると、「中野氏は田上庄に住し戦国時代佐々木氏部下の一将家なり、佐々木南北諸士帳に芝原村中野備後守芝原左衛門の二家あり、芝原氏は青地氏の支流なること別記せり」（滋賀県栗太郡役所一九二六）とあり先に紹介したものと少し異なっています。可能性として、参考にして『江州佐々木南北諸士帳』写本が別の物であることが挙げられます。

ただし、青地氏は佐々木氏の庶流にあたり、栗太郡の他の豪族の中でも抜きんでた一族であったと述べられています（滋賀県栗太郡役所一九二六）。よって、青地氏の一族が栗太郡一帯にその一族が点在した可能性があります。これは詳しい検討が必要でしょう。

さて、『江州佐々木南北諸士帳』にある「中野備後守」は中野備後守宗永だと思われれます。『近江栗太郡史』の「上田上村芝原法蔵寺過去帳」によると、宗永は法蔵禅寺を建立した人物であるようです。その子の中野加賀守宗成は、長享二年（一四八八年）に北野天満宮から社領の代官職に任命されています。

ちょうどこのあたりは『新修大津市史』に詳しく述べられています。非常に興味深い内容なので紹介します。

元々田上庄は京都の北野天満宮の荘園でした。しかし、正長元年（一四二八年）に足利將軍家の奉公衆である檜葉氏が突然収奪し、勝手に支配するようになりまし。この背景として、室町幕府四代將軍足利義持死去し、後継者に青蓮院義円（足利義教）に決まったものの、まだ將軍職には就いていない、権力の空白時期でした。そのため、中央政権の混乱が地方にも伝播し、非常に不安定な社会情勢だったようです。そして、地方領主の中には先ほどの檜葉氏のように他の領地を奪うようなことが多発していたのです。

ところが、応仁の乱の後、幕府の権威が弱体化するとともに、その奉公衆である檜葉氏の支配も弱体化します。そこに今度は六角氏が領地を奪う事態が発生します。これは田上庄だけでなく近江国全体で発生し、土地を奪われた領主達が幕府に六角氏からの被害を訴えています。このことで起きたのが二度の六角征伐です（第一次六角征伐（鈎の陣）長享元々三年（一四八七）一四八九年）、第二次六角征伐 延徳三々四年（一四九一）一四九二年）。いずれも征伐の間は元の領主に支配権が戻ったようです。田上庄では元の領主北野天満宮にその支配権が戻ってきました。長享二年と延徳三年の中野加賀守宗成の代官任命がこの時期にあたります。

ところが、幕府軍が引き上げると六角氏は息を吹き返し、結局再び領地を奪われてしまいました。そして第二次六角征伐以降は、北野天満宮は田上庄を取り戻すことができなかつたようです。

このように、古代から続く荘園制度が中世に至り崩壊していく様が上田上を舞台に繰り広げられていたのです。

また中野氏は、短期間ですが代官に任ぜられたことから、上田上に対して大きな影響力があつたのでしよう。これは、領有権をめぐる北野天満宮や檜葉氏等の争いの隙を狙い、また応仁の乱、その後の二度の六角征伐など、当時の不安定な社会情勢を背景に、着実に勢力を広げていった結果と考えられます。

- ・滋賀県立安土城考古博物館 学芸員 福西貴彦

【引用・参考文献】

- ・滋賀県栗太郡役所一九二六『近江栗太郡史』巻二
- ・滋賀県教育委員会・近江の城友の会 一九八七
- 『滋賀県中世城郭分布調査』五（旧愛知・犬上郡の城）
- ・大津市一九七九『新修大津市史』第二卷中世



三・中野城と法蔵禪寺遺跡の発掘調査について



中野城については、「はじめに」でも述べたとおり、『滋賀県中世城郭分布調査』三（滋賀県教育委員会他一九八五）に記載と推定地が示されています。また、中野藤太郎氏の「中野城趾考」に詳細な記載があります（中野一九八五）。特に、荒戸神社北側の尾根や山麓部分に、「なかんど」等、中野氏や法蔵禪寺に関する名称が転訛した地名が残ることを調査し、そこから推定されている点が重要だと考えます。

さて、中野城が荒戸神社の北側として、荒戸神社の南側、荒戸橋の正面を平成二七年（二〇一五年）に滋賀県教育委員会が発掘調査を実施しています（滋賀県教育委員会他二〇一八）。ここは法蔵禪寺遺跡と呼ばれる遺跡です（滋賀県教育委員会二〇一七、図1）。荒戸神社の周辺の尾根上には平坦面がいくつか確認されていますが、このうち神社の正面から南側に認められる七段の平坦面が法蔵禪寺にかかわると推定されています（藤岡一〇〇五）。法蔵禪寺は曹洞宗の寺院で、文明年間（一四六九〜一四八六）に中野備後守宗永が青松秀禅師を開山として創建したとされています。中野氏は荒戸神社の別当も務めていた関係で、当地に創建されたと考えられ、福王寺、蔵密院、三福寺、靈祐庵、玉泉庵、福賢軒、正眼庵、泉蔵坊、理蔵坊などがありました。寺勢が衰退して宝永七年（二七一〇年）に現在の芝原町に移転したとされます（宇野一九七六）。さて、発掘調査地点では、5か所の平坦面が確認されています（図2、調査対象地と平坦面1〜4）。発掘調査は、遺構の確認と、平坦面がいつの時代にどのようなように作られたかの確認を目的として実施されました。

結果、遺構は確認されなかったものの、平坦面を作るために数回の造成が行われていることが分かりました。一つ目の造成は、調査地の西側の部分で確認されました。斜面に自然堆積した土の上に、削った土を外側に押し出すように堆積してしましました。二つ目の造成は、調査地の北側で確認された盛土です。土層の上下関係からすると、非常に乱雑な造作であることから、二つ目の造成は一つ目の造成の後に行われた可能性が高いとしています。つまり、尾根の西側中心に行われた造成と北側を中心に行われた造成は、その時期が異なると考えることができます。

ただし、造成が行われた具体的な時期は、造成土の中から時期が確定できる遺物が出土していなため不明です。しかし表面から出土している土器が近世から近代の時期のものであることから、北側の造成は近代である可能性が高いと考えられます。西側の造成はそれ以前であろうと考えられています。

調査地の東側の谷を挟んだ尾根上には、法蔵禪寺跡と推定される連続した平坦面が確認されており、調査地の周辺に広がる広い平坦面が寺院のための造成である可能性が考えられたようです。しかし、調査の結果、戦国時代の遺物等は出土せず、この平坦面が法蔵禪寺と関係する可能性は低いと評価しています。

しかし、耕作地の造成のための平坦地には広すぎることから、単純に耕作目的の造成ではないのではないかとしています。このように中野城や法蔵禪寺はまだまだ分かっていないことが多いのですが、中野藤太郎氏の論文や滋賀県教育委員会の発掘調査のように、少ないながらも事実を積み上げていくことにより、今後新たな解釈や発見があると考えています。

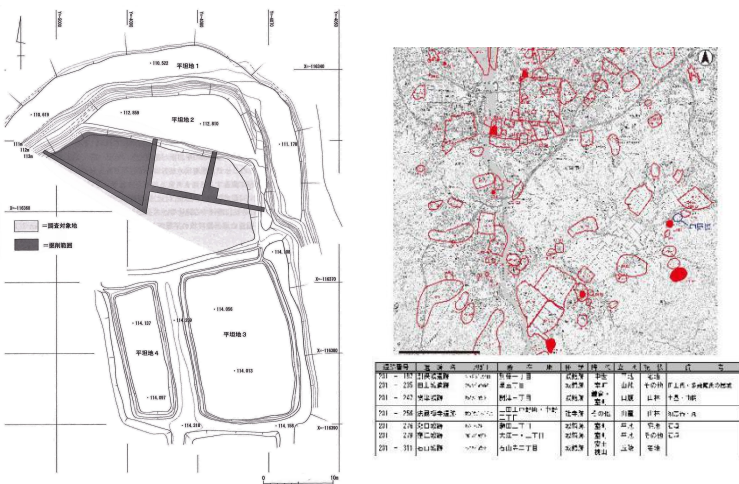


図1 中野城や法蔵禪寺遺跡の位置
(滋賀県教育委員会 2017、一部改変)

図2 法蔵禪寺遺跡発掘調査地点

滋賀県立安土城考古博物館 学芸員 福西 貴
 【引用・参考文献】
 中野藤太郎 一九八五「中野城趾考」『近江の城』第九巻 近江の城友の会
 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 二〇一八『法蔵禪寺遺跡 椿谷遺跡』近畿自動車道名古屋神戸線(天津く城陽)建設事業に伴う調査報告書
 滋賀県教育委員会編 二〇一七『滋賀県遺跡地図』平成二八年度版
 宇野健一 一九七六『新註 近江輿地志略 全』弘文堂書店藤岡英礼 二〇〇五 (15)「正覚山・法蔵寺」『忘れられた霊場をさぐる』栗東・湖南の山寺復元の試み、栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団

「地図を読む」

(公財)滋賀県文化財保護協会 調査員

神保 忠宏

もう十年ほど昔になるかもしれませんが、
当時「源内道」と呼ばれる旧道の整備に尽力していた松田さんから

「南大萱の歴史的な変遷がわかるような地図はないだろうか？」という質問をうけました。

私の職場は瀬田南大萱町にあります。しかし、車で通勤しているため、南大萱町の地理はほとんど知りませんでした。そこで、図書館へ出かけて南大萱を知るための資料を探しました。この資料は『改訂版 ひらけいく瀬田』大津市瀬田小学校編 昭和四十八年という、小学校社会科の副読本でした。この本は、昭和四十年代の瀬田の情報がまとめられており、大変参考になりました。

このとき知ったことは、「南大萱の景観変遷は、瀬田駅開業（昭和四十四年）以前と以後に分けられることができる」ということでした。

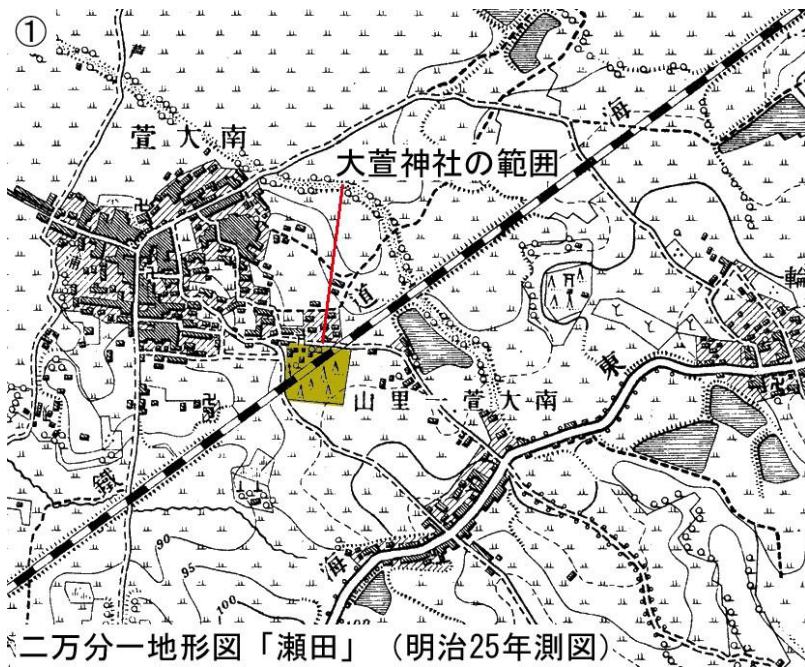
瀬田駅開業以前の南大萱は、東海道もしくは国道一号线沿線の集落だったといえます。

しかし、瀬田駅開業によって、南大萱の景観は京都大阪へ通勤するベッドタウンとして徐々に変化していったのです。

このことをふまえて、「かつての南大萱がわかる明治二十年代の地形図」「瀬田駅開業直後にあたる昭和四十五年の地図」「現在の地形図」が、もつともよくわかることを松田さんに伝えたのです。

最後に、瀬田駅前の地図を時代ごとにならべて、簡単な読図をおこなってみます。

①の地図は明治時代に作成された二万分一地形図です。東海道本線が大萱神社を分断して通過していることがわかります。



二万分一地形図「瀬田」(明治25年測図)

②の地図は瀬田駅開業直後の景観を記録した二万五千分一地形図です。瀬田駅から国道一号线に連絡する道路が、南大萱集落と方位を合わせた南北に通じ、現在と異なることがわかります。また、学園通りの原型が作られつつあることがわかります。

③の地図は平成時代の景観を記録した二万五千分一地形図です。瀬田駅前は区画整理事業により国道一号线に方位を合わせた街区に生まれ変わりました。



二万五千分一地形図「瀬田」(昭和45年測図)



二万五千分一地形図「瀬田」平成11年部分修正

蛍が飛び交う長沢川

西本 和正

瀬田東学区で身近な川と言えば、まず、地域の中
央を流れ、子どもたちもよく遊んでいる長沢川では
ないでしょうか。

物語は、凡そ二十年前位まで遡ります。

その頃の長沢川は、コンクリート護岸が増え、子
どもたちには「危ないから余り近寄らないで」と呼
びかける川でした。

そして、昭和三十年代頃から、私たちの暮しが豊
かになるにつれ、水質はどんどん悪化して、蛍どこ
ろか、魚やザリガニ等の生物さえも、その姿をな
かなか見ることができなくなっていました。

平成十四（2002）年のことでした。

「長沢川にホタルを戻せないだろうか」

ポツンとでたその一言で、地域のみんなの動きは
始まりました。その頃、瀬田東小学校のPTA活動
をしていた私たちも、その動きに加わりました。

昭和三十年以前の長沢川には、初夏になると蛍が
飛び交っていたそうです。

夕方には、大人も子どもも、みんな川べりに集ま
って、川面に淡い光を放ちながら飛び交う蛍たちの
何とも言えぬ幻想的な姿を楽しんでおられたそう
です。

そんな長沢川の復活です。

「そんなことができるのか。」半信半疑の状態とし
たが、石山の千丈川で先に活動されていた荒井さん
に勇気づけられ、まずは「ホタルをしらべる」こと
から始めました。

蛍が暮らせる環境になっているか、大津市

役所環境保全課の鳥飼さんたちの協力を得て水
質等を調査したら、以外にも大丈夫でした。公共下
水道整備のお陰です。

しかも既に、メダカやトンボの幼虫等の水辺の生
物も帰ってきていました。

それに力を得て地域のみんなに働きかけ、「ホタ
ルを育てる会」が発足しました。

瀬田東文化振興会、ぼてじやこトラストの皆さん
瀬田東小学校、私たちPTAと一緒に活動を始めま
した。年間をとおした活動計画も立て、即実行に移
しました。

もちろん、子ども達にも働きかけました。

瀬田東小学校の親子体験学習のテーマにし、蛍の
生育環境の勉強会から始めて、川の清掃や除草、蛍
の幼虫やその餌となるカワニナの育成、放流を行
いました。

そんな中でも、蛍の幼虫を頂いた上田上の東郷先
生からは、何か困ったことある毎に、多くのことを
お教え頂きました。

そして今、長沢川には蛍が暮しています。以来、

これまで幾年も野外体験学習や河川管理等へみん
なの力が折り重なり、今や、長沢川には、多くの水
辺の生物と一緒に、蛍がゆったりと暮しています。

そして、かつて、地域の子どもたちが、集まって
川遊びをしていた長沢川が蘇り、今、同じように、
多くの子どもたちが身近な場所として遊んでいま
す。

そんな長沢川を、地域の宝物として、これからも
みんなで、守っていこうではありませんか。

瀬田東親子野外体験学習



長沢川をそつどのぞいてみよう



2002年8月4日(日)

主催：瀬田東文化振興会

協力団体：瀬田東小学校、瀬田東小学校PTA、ぼてじやこ

トラスト、大津市環境保全課、瀬田東公民館

〔法〕国立オリンピック記念青少年総合センター主催「子どもゆめ基金」助成事業

水生生物でみる
しがの水

瀬田東文化振興会



このところ、喉の奥がヒリつくような渴きで目が覚めることが多くなった。

―はあくまた同じ夢を見た―

姉貴を抱いた父親が母親の横で、「おまえはもういいらない」とボクの肩を押す夢だ。母親は五歳の姉貴を連れて再婚し、再婚相手との間にボクが生まれた。父親はボクの実父だ。それなのに、夢の中の父親はボクを押し出す。

そんな朝は、現実ではなかった安堵とは裏腹に、目を閉じている以上の暗闇と無重力に襲われ、もたつくように起き上がる。

台所で水を飲む。九時。

誰も居ないのに『ガラン』と音がして、静かなのに『しーん』と聞こえてくる。家族はみな仕事に出ている、ボクは予備校に行く。一年だけの約束の予備校生活。これが想像以上に自分に合っていない。就職のことは見越して、幾つもの理系学部を受験した。見越したのは親であってボクではない。受験の時、テストの為の勉強を繰り返し書きしてきたボクに、散々無駄にしてきた時間が塊になって仕返しに来たのだった。

何も食わずに駅に向かう。

外は夏が充満し始めたようだ。去年より暑さが増すと、ニュースじゃ毎年同じことを言っている。まだ午前中なのに、アスファルトは日差しを吸い込んで、ただ熱いだけの塊だ。そのうち人を吸い込むかもしれない。

あゝこの暑さは二浪の予感すらしてくる。

駅までの途中に架かる唐橋の、一番高い所で足を止めて川上を見る。強い風に煽られて水が波立つと、加速しながら大海に出ていく大型船の先端にいるような錯覚で目眩がするのだ。最近はその目眩に中毒気味だ。

ふと、隣町の民放局でアナウンサーをしている姉貴はどうしているだろうと思った。同じ屋根の下に居ながら、しばらく会っていない。

「あの、もし。近くにお住まいの方ですね」

背後から見知らぬおじさんが声を掛けてきた。その人は尋ねてもいないのに「マツオです」と名乗ると、不思議なカバールを付けた両手を欄干にのせ、ボクの隣で琵琶湖のずーっと奥の方を見た。近頃は中高年のまち歩きが盛んだが、こんなコスチュームの人は見たことがない。

聞こえなかった振りをして立ち去ろうとしたその時、「行きましよう」といきなり手首をつかんで、その人はもの凄いい力でボクを引っ張った。こんな痩せ細ったおじさんを振り払うだけの力さえ、入試で使い果たしていたのか。そんなバカな。

結局、マツオさんが放つ坑えない潔さと、奇妙な服装に引かれて電車に乗り、連れて行かれたのは錦織の閑静な住宅地（史跡 近江大津宮錦織遺跡 第一地点）。

歴史に名を刻んだのは僅か五年半ほどだ。再現された礎石跡が住宅に囲まれて、いかにも肩身が狭そうに並んでいる。

「六六七年の春に、京から続く小関越えを辿って、皇子達や額田王殿らは近江をめざしました。」

その中には鎌足殿に連れられた幼い不比等殿の姿もありました」

ふーん。第一というからには、幾つもの地点があるのだろうが、これだけ家が密集していると広さなんて全く想像がつかない。と、言おうとする前に、マツオさんは又ボクの手首を掴んで、今度は背丈以上もある石碑に向かって走り出した。

危ない、ぶつかる！

ボクは霊長類の本能に従って、ギョツと目を閉じた。

「宮殿です」というマツオさんの声で目を開けると、美しい内裏南門を繋ぐ長い回廊の庇の下に居た。

今歩いてきたのは都の大通りらしいが、信号もマシオンも線路も姿を消し、空と水が接近した望洋とした海のような琵琶湖が見えた。鳥の声に混じって槌音が聞こえてくるのは、もしかすると都は未完成なのだろうか。

湖畔の木立で、霞んだ対岸の方角を誰かがじっと見ている。後ろ姿は、文化祭で見た隣のクラスの出し物の衣装に似ているが、とても普段着る勇氣はない。

それにしてもだ。水陸の手段があるとはいえ、比叡山と琵琶湖に挟まれたこの地では、宮殿や政

の建物を建て民の暮らしを整えるには、都としては少々手狭すぎやしないか。

『都を遷すことには、反対する者が少なくありませんでした』

でしようね。で、誰？

「あの方は近江で即位された天智天皇です」

ああ、そう。「ええーっ」

歴史の教科書がパツカーンと飛び散る音。彼、いや天智さんは近寄り難い背中をボくらに向けたまま、身じろぎもせず続けた。

『聖徳太子亡きあとの飛鳥は混沌としていました。政の改革や朝鮮半島での敗戦のあと、新しい都が必要だったのです。近江の地で、誠の政とは何か、私は自らに問い続けました。たとえ狩りや宴に興じている時でさえ。ですが、命に永遠はありませんでした』

国運の賭かった内外の激動時代。病に倒れた天智さんは、碁盤の目の都大路を完成することが出来なかったのか。そして、皇子と実の弟が唐橋を最後の決戦場とした壬申の乱で、近江での夢は潰え未完の都となってしまうというわけか。

マツオさんが慰めた。

「でもあなたは、決して政を疎かにされていません。あなたは近江でこの国の骨組みを創られたのです」

『・・確かなことは、ここでの日々、淡海の美しさがすべての思いを癒してくれたということです。』

ご覧なさい。花びらが水面でもう一度咲く様を。今日、あなた方とこうし春を見送ったこと、決して忘れません』

天智さん・・・散った桜の花びらが、苦悩するその人の足元に寄せた小さな波で、集まっては離れてを繰り返している。

ヤバイ。きれいだと思つて目を閉じてしまったのだ。瞬間、または自分の足の行方も定まらず、瞼の奥のスクリーンに母方のばあちゃんが現れた。

ばあちゃんは、四人の子供を育て姑と何人もの小姑の世話をし、何十年も病魔と闘いながらも働いて働いて、そして働いた。ボクには、じいちゃんもその周りの人間も自分勝手な大人にしか見え、ばあちゃんただけ口をきく嫌な子供だった。

そんなボクにばあちゃんは、『桜は散る時、誰も恨んだりしてないよ』とか『人と比べなくてもいいんだよ』とかつぶやいた。ばあちゃんの言葉の欠片は、決まってその時のボクに命中して、帰りの靴を軽くした。

ばあちゃんは今日まで、何にアンダーラインを引いて生きてきたんだろう。生きられなかったもう一人の自分に、嫉妬したりしなかったのだろうか。ボクは何一つ聞けずに、黙ったままばあちゃんの横で、手にしたコーラの缶を大事そうに弄ぶだけだった。

ばあちゃんは毎年、春の終わりを印すみたいに桜の花を塩漬けにしていたけれど、今年、最後の塩漬けを残したまま、寝込むこともなくあっけなく逝ってしまった。そのあっけなさにボクは何故だかほつとしたのだった。

恐る恐るゆっくり目を開けると、ボクらはひとときわ高い丘に立っていた。

眼下の瀬田川に無数の荷船。人々の往来が絶えない唐橋からは、他の道とは明らかに異なる太く力強い動脈のような道が、真つすぐにこの丘へと引き寄せられている。

「平城京時代の官庁街、近江国府です」

これが？まるで宮殿じゃないか。出口を見失うような広さ。すべての屋根には手の込んだ珍しい模様の瓦。一直線に並んだ建物群も、遠く三百メートルはあるだろうか。

謁見に訪れる人間は、すでに唐橋からここを仰ぎ見て、到着すればたちまち頭を垂れるほかないようにできている。堂々と呼ぶに相応しい、これほど圧倒的な力を見せつけるための視覚装置が揃えられる人物は誰なのか。

するとマツオさんが小さく呼んだ。

「不比等殿」

不比等といえは奈良時代の最高幹部。もうボクは仮装のような後ろ姿にも驚かなくなっていた。炭酸水の一気飲みをしたあとは、何を飲んでも物足りないくらいだ。

「わざわざ平城京を見下ろす高台に、藤原家の氏寺、興福寺を建てる暴挙さえ許された不比等殿が、この近江は誰にも渡しませんでした。それほど近江は大国だったのです」

それからボクらは、空と稜線の間が焰く染まる丘へと歩いた。微かに体温が上昇した。

「瀬田丘陵一帯は最大にして最強の製鉄コンビナートでした」

確か、鉄はヒツタイトで生まれたと習った。鉄の道はその道すがらで、時の権力者達をことごとく虜にしながら、どのようにして瀬田丘陵に辿り着いたのだろう。

不比等の孫、仲麻呂が製鉄所を指揮して廻っているが、その呼吸の荒さがボクは気になった。

「鉄と木材を平城京や大仏殿の造営にも拠出し、近江の財貨物流を支配することで、藤原家の栄華は不滅の手形となるはずでした」

政まことのど真ん中で鎌足から引き継がれてきた、藤原家の眩ばかりの栄華。

「最期は、敵方に唐橋を渡らせてもらえず、よすがとした近江で散ることなど、この頃はまだ知る由もありません」

古代政界のサラブレッドの慢心に油断が付けいたのか。彼の荒い呼吸は、相続した栄華の不渡りを恐れ、不安と焦りで夜も眠れない、市井の人と変わらぬため息だったのだ。

「急ぎますので回りましょう、唐橋へ」

見かけによらず強引なマツオさんに手首を掴まれても、ボクはもう驚かなかった。自ら目を閉じると、唐橋はいつものままだった。

「信長殿は巨大な湖に巨大な橋を架け、琵琶湖の周囲に重臣を配し、天下布武を顕示しました。けれども一五八二年、京に上がられた信長殿が、ここを渡って安土に戻ることは二度とありませんでした」

本能寺の変！

神仏をも畏れぬ信長を待っていた不覚の最期。自分の正義が相手には不義ということは、歴史の中だけではなく、ボクらの日常にも息をするように存在している。

「ここは天下分け目の橋なのです」

そう言うのと突然「じゃあ」と、マツオさんはモノクロームの奥に向かって歩き出した。見送るボクはカラーのままだ。

時計は午前九時一五分。

「アキラ殿、またお会いしましょう」

はい。いやいやいや、ボク、いつの間にか名乗ったんだ。

「あ、あの。マツオさん」

「膳所のギチュウジに居ますから」

ギチュウジって、そこで働いているってこと？

「マツオさん！」

叫んだ声は切れ目のない車の騒音に掻き消され、空気圧で閉まる扉があるかのようにマツオさんはいなくなった。

思えばマツオさんの、ハロウインのようなエッジの効いた姿に、誰一人として目を擦ったり振り返ったりしてなかった。

どういふことなんだ。ひどいよ、マツオさん。これじゃあ書き出しばかりが浮かんで、永遠に二行目が書けない小説家みたいじゃないか。参ったなあ。

こうなったらギチュウジに行く他ない。固く握っていた拳を広げると、塩漬けの桜の花びらが一枚、じっとボクを見ていた。

脈拍数を上げながら、駅員に聞いた通りに到着した「ギチュウジ」は、「義仲寺」だった。車の離合が難しそうな細い通り沿いにある、小さな門をくぐると思いで尋ねた。

「マツオさんはいますか」

ボクの質問に、受付の女性がわずかに間を置いて、口元の端を緩めながら右手を伸ばした。指された先に進むと、石碑に見えたのは塔を冠した木曾義仲の墓石だった。

次にボクの目がゆっくり右側に動いた瞬間、首の周りがカッと一気に熱くなり、脈拍はもう計測不能になった。

芭蕉翁ーマツオって、松尾で、おじさんはー

生涯の多くを旅に生きた松尾さんは、故郷でもない、倒れた地でもない、近江に眠ることを選んでいったんだ。

首の熱が頭と胴体に拡散したせいで朦朧としたまま山門を出ようとしたボクに、一つの句が追い打ちをかけた。

ー行く春をあふみの人とおしみけるー



「あっ！」

もう一度唐橋に戻ろう。おじさん、いや松尾さんはまだいるかもしれない。

唐橋に取って返したボクは、果てない野望に翻弄されたこの橋の憂鬱に同情しながら、今では慣れ親しんだあのコスチューム姿が再び現れてくれるのを待った。けれど、何度振り向いてみても、水が吐き出されるように束になって流れていく川が、漫然とあるだけだった。

すぐにスマホを取り出した。

「もしもし、どうしたん」

「姉ちゃん、ボク、僕、文学部を受けるわ」

姉貴は大声で笑ったが、スマホの向こうがやけにザワついている。

「今ね、ヒースロー空港なの」

姉貴は京都駅にでもいるかのように言う之又笑った。

「アハハ。憂鬱って字も書けないのに楽しい子だな！」

「・・・」

「人ってさあ、体と心、どっちが先に壊れると思う？」

姉貴は親に相談することなく、もう何日も前にテレビ局を退職しているという。連絡するから。必ず帰るから。アキラの歩幅でいいんだよ。文学部万歳と言うと一方的に通話を切った。話し相手を無くしたスマホの断末魔の声は、夏のアスファルトに水を撒いたあとの空気のように僕に纏わり付いた。

僕がまだ、新聞紙を丸めて作った剣を振り回していた頃に、姉貴の吃音は始まっていた。周囲の誰もが大学を卒業後、アナウンサーという言葉を生業とする仕事を選び、そして合格した姉貴に驚いた。

けれど、僕は知っていた。姉貴が学生時代にヘッドホンで聞いていたのは、流行りの音楽なんかじゃない。自分の声なんだ。僕はそのことを誰にも言わなかった。青春などと誤魔化して、得体の知れない物に向かつて逆らっていただけの僕は、姉貴の純度の高い本気の前に、沈黙を選択したのだ。

ばあちゃん、僕、もうちよつと勉強するわ。かっこよく言うけど、言葉の可能性に賭けてみようと思うんだ。

出会いや別れ、歎び哀しみ、期待と失望、誠意と欺瞞、寛容排除、栄光と犠牲、そして争いも。起点は少なからず言葉が担っている。沈黙だつて言葉のあと先に赦された臨界なのだろう。

父も母もいないと言っていた松尾さん。高野山の帰りと言っていた松尾さん。きつと今もどこかの

国境で、市井の人や史人の静寂の聲を聴き、鎮魂の句を詠んでいるはずなんだ。それでもやっぱり松尾さんは近江に帰ってくる。

いつか、晴れて言葉について語る日が来るとしたら、間違いない僕は今日のことを選ぶだろう。

また会えますか、松尾さん。また会えますよね。僕は待っています。

そう、僕はこのまちが好きかもしれない。

《この作品は「湖都の文学」2020に掲載》

地域連携型体験学習について感じたこと

瀬田東小PTA 平塚悦子

今から二十年前の瀬田東学区はどの様な風景だったのでしょうか？

引越して来て、都市に近いのにこんなに田畑が残っているんだ、川が綺麗なんだ」と言う瀬田駅周辺の第一印象でした。

あれから、十年あまり、昨年も子供達は暖かくなれば長沢川に遊びに行き、夏にはホテルを見る事も出ています。

二〇〇四年から続けてくれている、稲作り事業も昨年はコロナ禍の為に実施できませんでしたが、毎年一年間を通して米が出来るまでを体験する事ができ、教科書だけでは分からない水の冷たさ、泥の暖かさ、稲の匂い、つきたてのお餅のおいしさ、身体いっぱい感じる機会を与えて頂いています。

体験を通じ、保護者も顔の見える関係性が築け、また、親子で体験を共有すると言う貴重な時間を頂いています。

ありがとうございます。

小学校PTAに携わり、地域の方々のご尽力で今の瀬田東の自然や文化が繋がっている、と感じる日々です。

これから、二十年後、子供達が大人になった時、瀬田東はどうなっているのでしょうか？

その子供達にも長沢川で遊ぶ楽しさやホテルの美しさ、稲の成長を見せてあげたいなあ・・・と思っ

ています。文化や自然を繋いで行くことは容易ではないと思

います、しかし、子供達にとつてのふるさとを守

て行くのも、これからは保護者の大切な役割ではないかと感じて



【地域交流を通して】

学園前こども園

開園して5年目、少しずつ保育も定着してきました。子ども達に豊かな生活を経験してほしい、地域の方に見守られ地域の中で育つ子どもになってほしいという願いで地域の方との交流をお願いしました。「まずは、あまり無理をせず徐々にしましょう。」という松田さんの温かい言葉をいただき、一緒に園外に出かけることから始めました。お家の方や園の先生と違う方との出会いということで、緊張した面持ちの子ども達でした。最初に出かけたのは瀬田公園。いつも散歩に出かける公園なのに、奥にこんな遊歩道があったとは知らず、子ども達のみならず、保育士たちにとっても驚きの連続でした。子ども達の探検気分も盛り上がり、園外という雰囲気も手伝って少しずつ打ち解けていったように感じます。続く山ノ神遺跡の探検など、普段子ども達が通り過ぎている場所も案内して頂くと印象が変わるものです。

交流2年目は瀬田公園の探検に加え、山ノ神遺跡で焼き窯を見せて頂いたり、たこ揚げを教えて頂いたりしました。特に焼き窯を見せて頂いたことは子ども達の印象に残ったようで、園に帰ってから興奮しながら話す姿が印象的でした。まだ温かい窯に触れられたり、薪入れを体験させてもらったり、普段の生活では経験できないことを体験させて頂け、子ども達の心に強く印象に残ったようです。いつも絵本の読み聞かせなども用意してくださり、動の活動と静の活動があり、子ども達が興奮するだけでなく、心を落ち着けて活動を印象付けることができるのもステキなところだと思っています。社会や地域にとつて子ども達は未来への宝です。その子ども達は決して園や家庭だけで育つものではありません。地域の方などとの触れ合いを通して、いろんな人からの愛情を感じ、見守られているという安心感を味わいながら成長していくものだと思います。またいろんな方とのかかわりの中で、コミュニケーション能力の向上にもつながると思います。子ども達の成長とともに今後も瀬田東文化振興会の方と交流しながら、自分たちの街をよく知り、そしてこの瀬田を故郷と感じ、温かい記憶と共に、今後生きていく中でその力の一つになつていくといいなと願っています。

地域連携型体験学習について

大津市立瀬田東幼稚園

今年度は、コロナ禍の中、地域の方と触れ合える機会がもちにくい中でしたが、田んぼまでいけないくても、プランターで作った、幼稚園田んぼでの田植え体験として、子どもたちに経験をさせていただきました。園庭の中に居ながら、田んぼに生息する生き物に出会う場となり、お弁当に入れているおにぎりになるお米が、こんな風にできていくんだということを実感することに繋がりました。出来上がったお米の量は、ほんの少しではありましたが、子ども達の心の収穫は大きなものになりました。

親子須恵器作り体験では、山ノ神遺跡の登り窯に木をくべる経験も現地でさせていただき、スイッチ一つでガスの火もつく便利な時代に、直火の熱さや煙のにおい等、五感で感じた経験は、体の中に残る思い出となったと思います。

また、年が明け、コロナの警戒ステージのランクが上がった中でも、紙1枚から作れる凧の造り方のビデオレターで届けていただき、「糸の浮く位置具合で揚がるか揚がらないかが変わることも、子どもに考えさせよう。」まさに、園が目指す主体的に考える子どもの育ちを大事にしていたたく取り組みとしてサポートいただきました。

お子さんの幼稚園入園を機会に、地域の自然や文化に触れることを、親子共に初めて経験されます。今後も、幼稚園、地域、家庭が連携して、地域へ親しみを感じ、地域を愛する子どもに育てていくことに繋がる体験学習を幼稚園教育の大事な内容として引き継いでいきたいと考えています。

地域連携型体験学習について

一里山ひかり保育園

一里山ひかり保育園は瀬田に開園し四五年になります。

仏様の教えを守り「生命を大切にする保育」を基本方針とし、「明るく・正しく・仲良く」を大切に毎日たくさん子ども達が遊びを学びとして主体的に過ごしています。子ども達が地域の中でのびのびと育ち、様々な体験を通しての「まなび」を自ら得てくれることを大切にしています。

およそ十年余程前に文化振興会の方々にお誘い頂き、山ノ神遺跡を拠点にたくさんの方々の体験をさせて頂いています。お米ができるまでを、田植えから稲刈りまで体験させて頂き、収穫した新米でおにぎりを作って食べたり、柿を使って干し柿作りや柿渋染めでTシャツを染めたりもしました。川遊びでは笹で舟の作り方を教えてもらって川に流したり、小魚をすくったりして楽しみました。さつまいもも苗付けから収穫までを体験させて頂き、子ども達は獲れた大きなさつまいもに大喜びでした。冬には、せいろで蒸したもち米を使ったおもちつきに、たくさんのお米の笑顔と歓声があふれる会となっております。

現代ではとうてい経験できない自然と触れ合ったり、住んでいる地域の歴史や文化を教えるというところで、地域資源をふんだんに活用した心豊かな教育へと導いていただいています。

これからも地域の様々な世代の人と交流し、つながることで、「やってみてたのしい」「もつとしたい」「たのしい」と思い、豊かな心と意欲を共々に育んでいけたらと思っています。

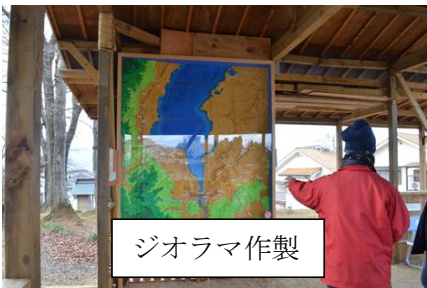
国史山ノ神遺跡復元の追想

吉居 紀生

昔から「どんぐり山」と呼ばれ親しまれてきた山ノ神、今でも秋になると、ところかまわずどんぐりが散乱しています。今でこそ山の風情はなく小高い丘となっています。

七世紀（六六七年）近江大津宮の遷都、天智天皇の世が栄し頃と時を同じくして、ここ山ノ神の地は古代製陶産業の一大拠点となっていました。昭和五十三年より順次発掘調査が始まり数多くの陶器が出土しています。平成十五年には四号窯が発掘され鷗尾（しび）四体が出土しました。高さ一、四mと想像を凌ぐ大きさに当時の興奮はさぞかしと想像されます。平成二十五年六月に国の重要文化財に指定されて大津市歴史博物館で展示されています。この間、数多く出土した陶器は復元され、その一部が東市民センターの第一会議室で展示しています。平成十七年七月この山ノ神遺跡と共に源内峠製鉄遺跡など瀬田丘陵生産遺跡群として国史跡に指定されました。これらのことを契機として遺跡復元実行委員会が立ち上がり当会もメンバーとして参加し活動にも積極的に取り組んできました。遺跡は発掘調査が済むと埋め戻しがなされて地上には何一つとして証がないのです。標柱のみとなります。平成二十三年より手始めに源内峠製鉄遺跡区域で遺構を地上に復元、その後平成二十六年の秋より三年間、山ノ神遺跡にて最初に丘の上に工房小屋を復元し、二年目には十二mに及ぶ穴窯と、鷗尾四体を発掘資料に基づいて実物大で復元、三年目は県南部の遺跡、古道などを表記した地形模型ジオラマを作成し工房小屋に展示、三年に及ぶ復元作業は素人集団で成したもので、いろんなトラブルにも知恵を出し合い、チームワークでやってきました。この間新聞も随時とりあげてくれ励まされもしました。これらの取り組みが完成に至った時の達成感、今振り返る時、何

ものにも変え難い喜びでありました。



ジオラマ作製



しび復元作業



穴窯復元作業



工房小屋復元



須恵器の復元作業



絵本読み聞かせ



凧揚げに夢中

時代を拓く文化の翼 崎田 孝行
令和三年。世界は新型コロナウイルスの感染が一億人を超えたとのこと。この大変な今、時代を担う子供達に何かを残したいと、特に保育園や幼稚園児達には体験をさせること。米作り体験の中で田植えをした時、男の子が裸足で田んぼの中に入るのが気持ち悪いとかで入らないので強引に抱えて、ところが泥だらけになって最後泣きました。陶器作り、凧揚げや絵本の読み聞かせをしています。記憶に残る体験をし、思いっ切り明日に向かって羽ばたきたい下さいね。

伝統文化の継承 「いとこ煮」

大津市旧瀬田南大萱地区に伝わる不思議な名が付いた郷土料理がある。

「いとこ煮」や「ほらがい」である。

旧南大萱地区独特の料理と聞いていましたが、二〇二〇年十一月一日三日の京都新聞に「いとこ煮」が京都の郷土料理として掲載。

そこで、語源や分布を調査したところ、山形県庄内地方のもの、北陸地方（新潟県・富山県・石川県）のもの、滋賀県や奈良県、京都府のもの、および山口県萩市周辺に伝わるものが知られていることがわかりました。

「いとこ煮」とは、小豆と根菜の煮もので、神仏への供物を集めて煮た行事食が始まりです。地域によってもその具材や味付けはさまざまです。

①根菜類の固い物から「追い追い煮る」を、「甥甥（おいおい）」煮る調理からの説。

②小豆と根菜類等を「銘々に煮る」を、「姪姪（めいめい）」に煮るといった語呂あわせのしゃれで「いとこ煮」と呼ばれるようになったという説です。

③北陸の地方では、その地に縁のある浄土真宗の開祖である「親鸞聖人の遺徳（いとく）を偲んで食べる」ことが転じて「いとこ煮」となったという説。

長い歴史の中で、さまざまな説があるのも、それだけ地元の人に親しまれ、土地に根付いた料理だといえるのではないのでしょうか。

この伝統文化、郷土料理を地域の宝物として、後世に伝え、継承し続けたいものです。

調理人 大津市瀬田北女性会の皆さん

世話役 瀬田南大萱町地域活性化推進会長 様

資料提供 上田上芝原 中野 智之 様

上田上牧 東郷 正文 様

ご無理を快諾頂き有難うございました

松田 文男（記）

口伝 旧南大萱地区郷土料理

「いとこ煮」レシピ

大津市瀬田北女性会

一、材料

小豆 二〇〇g さつまいも 二本

団子 四〇個

二、調味料 白砂糖三〇〇g 三温糖三〇〇g

三、団子の材料

小麦粉 四二〇g 白玉粉 二〇〇g

水 四〇〇cc

四、作り方

① さつまいもはきれいに洗い一口大に切り、軟らかくなるまでゆでる。

② 小豆は三時間水に浸け、軟らかくなるまで煮る。（煮汁は捨てずに使う）

③ 団子は白玉粉をぬるま湯で混ぜ、小麦粉を加え耳たぶ程度の硬さまでこねる。

④ 団子を熱湯水の鍋にスプーンで一口大の大きさにして入れて団子が浮き上がってくるまでゆでる。

⑤ ②の鍋に①と④の材料を入れて、砂糖二種類を加えて塩で味を調える。団子の色が薄茶色になるまで煮る。



「いとこ煮」の完成

長浜湖北町伊部地区

「いとこ煮」

親鸞聖人の遺徳（いとく）を偲んで出される精進料の

1品

小豆と里芋



奈良、京都、大津等地区の

「いとこ煮」 小豆と南瓜



「いとこ煮」を郷土料理としている地方

印で囲っている地方です

府県の一部の地域に存在しているが材料や作り方は異なりますが、小豆は必ず使用されているので準拠しました。

「参考」

上田上芝原地区の「いとこ煮」レシピ
小豆と根菜類を主とした煮込み料理

一、材料

小豆 カップ1 ごぼう 1本 人参 1本

大根 3cmの太さを3cm 蓮根 3cmの太さを3cm

里芋 5個 かぼちゃ6cm×3cm

二、作り方

①小豆は洗って三倍ぐらいの水を入れ、灰汁を取りながら、やわらかくなるまで煮る

②小豆以外の材料を1cm位に切り、ごぼう、人参、蓮根、里芋、大根、南瓜の順にやわらかくなるまで煮る。

③②の中に小豆を入れ、砂糖、醤油で味付けする

伝統文化の継承「ほらがい」

ほらがいの由来は、わかりませんが滋賀県地域婦人団体連合会の郷土料理本で「ほらがい」団子が（瀬田東）紹介されています。そのレシピにはイバラの葉で包むと記載されており、サルトリイバラ、別名山帰来の葉で包むイバラ餅（団子）で、全国広範囲に分布しているものと同じであることがわかりました。

餡や団子の材料はほぼ同じです。

ただ、名前は包む葉っぱの種類や餅の形が名前の由来とされます。

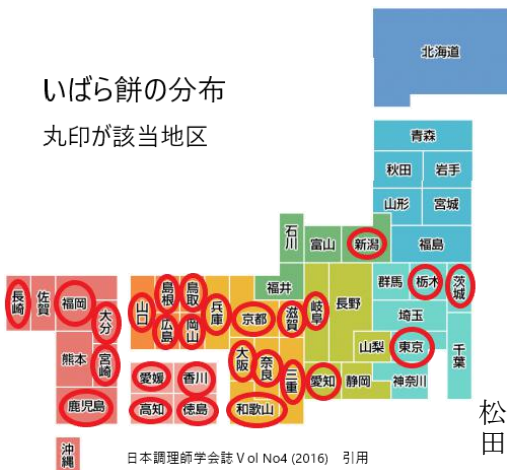
また、柏餅は元々サルトリイバラの葉で包まれていましたが、江戸など、大都市では、サルトリイバラの葉がたらず柏の葉が代用したという説もあります。田植えが終わった時や端午の節句等で食べられる習わしがあったという。（5〜8月）

私たちの先人の知恵と工夫のすごさを再認識するとともに、葉っぱで包むとかそれを蒸すことさらに美味しさと腐敗菌から守り長時間食べられるなど、この素晴らしい伝統文化の郷土料理を地域の宝物として、継承し続けたいものです。

松田 文男（記）

いばら餅の分布

丸印が該当地区



日本調理師学会誌 Vol No4 (2016) 引用

参考・引用文献
日本調理科学学会誌 Vol 140
No 4 289~29. (2016)

旧南大萱地区郷土料理

口伝「ほらがい」レシピ

大津市瀬田北女性会

一、材料

小麦粉 200g 塩 少々 つぶ餡 600g

二、作り方

①小麦粉に塩を入れて耳たぶくらいの硬さまでよくこねる。

②あんこを一口大の大きさに個数分に丸めておく。

③②の生地を手のひらでうすくのぼし、中心にあんこを入れ丸く包み込み

④蒸し上がった蒸し器に入れて生地の色が薄茶色になれば完成



ほらがいの完成

アレンジ「ほらがい」レシピ

大津市瀬田北女性会

一材料

小麦粉 200g 蒸しパンミックス400g
つぶ餡 600g

二、作り方

①小麦粉に蒸しパンミックスを混ぜて耳たぶくらいの硬さまでよくこね三〇分寝かす

②あんこを一口大の大きさに個数分に丸めておく。

③②の生地を手のひらでうすくのぼし、中心にあんこを入れ丸く包み込み

④アルミホイルに乗せ蒸し上がった蒸し器に入れて、約一五分蒸して完成です。



アレンジほらがいお完成

「ほらがい」団子（瀬田東）

材料

小麦粉 カップ1 (200g)

ミックス粉 カップ2 (400g)

こしあん

砂糖・塩

イバラの葉（山帰来の葉）



作り方

①小麦粉、ミックス粉、砂糖、塩を混ぜてよくこねる

②いばらの葉は綺麗に洗っておく

③①生地を手のひらでうすくのぼし、中心にあんこを入れ丸く包み込む

④③をいばらの葉にのせ、葉ごと半分におろす

⑤よく蒸し上がった蒸し器に並べて蒸し仕上げる

⑥一〇分たったら、少し葉っぱをめぐってみて、ツルツとめくれればOK、葉にくっついてきたら、蒸し足りないで時間延長。

（滋賀県地域婦人団体連合会発行 郷土料理引用）



© Masakazu Horii

瀬田東文化振興会だより

(ふれあい二十周年記念号)

発行日 二〇二二年四月一日

編集人 吉居 紀生

発行所 瀬田東文化振興会

大津市一里山三丁目十六ー一

大津市瀬田東公民館内

〇七七ー五四五ー九〇〇ー

発行責任者 松田 文男